コラボレーション（学校での予防カウンセリングの授業実践についての相談援助部門）仕事の境目と分担を考える

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>長谷川 恵美子</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>ネットワーク 年報</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>60-61</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2004-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15083/00036818">http://doi.org/10.15083/00036818</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
コラボレーション——仕事の境目と分担を考える——

報告者 センター協力研究員（聖学院大学人文学部専任講師） 長谷川 恵美子

近年大学で心理学関連の授業の受講を希望する学生は多く、また一般向けの「カウンセリング」関連の講座の人気も高いようである。確かにカウンセリングの知識や技術は、対人関係や会話の中で活かされることがあるが、私たちは日常生活の中で、常に相手にカウンセラー的な役割を求められているわけではない。

このようなことを私が強く意識するようになったのは、あるケースを担当したのがきっかけであった。まだ私がカウンセラーになりつつての頃、面接相談を担当していた中学生のクライエントが、「お父さんは、カウンセラーじゃないってお父さんなのにな…」と戸惑いながら話したことを思い出します。彼女の父親は、もっと熱心で死ぬほど子どもたちの気持ちをなんとか汲み取ろうと、毎週本屋によっては何冊もカウンセリングや思考開のところについて書かれた本を購入し、机の上にカウンセリングの本が山積みになっていた様子であった。まだ助け出しのカウンセラーだった私にとっては、子どもの気持ちを理解しようと必死で努力するお父さんは、他のケースのご両親に比べ優等生にさえ思えた。しかし沢山のカウンセリング関連の本を読んだ後、父親が彼女に対してとった、「君は、今、そう思っているんだだ？」というようなカウンセラ的な対応は、当時彼女が求めていた、「へやおや！そんなことすんじゃない！」と叱ってくれるような力強い父親らしい対応かと力がけられていたのであり、父親の努力にもかかわらず、彼女にとっては見当違いのお父さんとなってしまった。そのズレが修正されるまで期間に彼女から学んだことは数え切れないが、彼女のこの言葉は、あれから10年近くただ今でも、様々な面接場面で思い出されるものである。

心の問題が注目を浴び、カウンセラーのような存在が求められる世の中ではあるが、その他の役割の人材も同様に必要であることわからせぬように思う。私たちは社会の中で生ききてゆく際、相手に対し、親近的な役割、母性的な役割、お姉さん的な役割、師匠のような役割、仲良しの役割、初心を思い出してくれる後輩の役割、時には厳しいを示す教員や上司など様々な存在を必要としているように思われる。

スクールカウンセラーをしていると、時折、「○○（先生）って、きもう！ホントうざい！なんならかんだら言うで、からんでくれんだよ！だから授業に出なくて！」などという話が聞こえてくることもある。そんな癇癪を、正面から受け止める必要がある場合もあるが、しばらく面接していると、「うざい」や「きもう」と、口では言いながらも、まず悪気がしていることが判明することも少なくない。生徒たちにとってみれば、時折声かけをしてもらい、キャリアリーフィールドで、友人たちの間にいてもいきいきしていると誤解されることもある。また逆にその教師の働きかけに対し、「大雑把なおかつ意図のないものでないらしい」人に共感するような姿勢を示したのでは、せっかく生徒たちの間に与えられている人材資源を活用できず、かえって可能性を阻害してしまうようにさえ思えるのである。

時折企業や学校で、心理学の勉強に非常に熱心で、下手なカウンセラーよりも知識が豊富な方がいらっしゃる。そのような状況の中、カウンセラーのように、時にはカウンセラーチャチャーチャチャーめただけでも役に立つが、逆にカウンセリングの知識や技術にとらわれすぎて、本来の職種からの視点や役割がおろそかになってしまうような状況に陥ってしまうことも度々みられる。

カウンセラー側から考えてみても、病院では医師や看護師が、企業や学校では養護教諭や保健婦がクライエントと身体面をきちんと把握しフィードバックしているという安心感が、本来のカウンセラーとして十分に活躍することができるよう思う。カウンセラーもどこか存在が悪いとは思わないが、本来の重要なそれらの専門家としての動きがなくなってしまってしまうと、本末転倒にしないのではないかと懸念される。

連携が求められる今であるからこそ、専門領域のいくつかの充実、さらに協働作業に参加するスタッフ1人1人の「個」を大事にすることが求められているのではなかいか。複数の人数が相互作用してゆくコラボレーションでは、競合する効果が期待できるといわれているが、そのような効果を出すためには、みなが同じことをするの
ではなく、参加するそれぞれが、お互いを「知る」ことが大切なように思う。

実際の現場では、お互いに、「カウンセラー」、「養護教諭」といった、それぞれの職種のイメージは持っていることが多いが、たとえ同じ職種であっても、それぞれが担当している仕事は、職場の規模、システム、人数構成、組織の構成、スタッフの年齢、役職、それぞれの人間関係などによって少しづつ異なっているものである。また職種というよりは、その要件にかかわる1人の個人として、それぞれの個性やスキル、特徴を尊重することで、スムーズなコミュニケーションが可能となることも少なくない。コラボレーションには欠かすことのできない、率直な質問や新しい提案も、それぞれが尊重され、ある程度対等な関係がとれてはじめて生み出される。「〇〇の情報に詳しい」、「〇〇にはまっていたことがある」、「〇〇さんが仲が必要」といった一見ありきたり関係のないような些細な情報であったとしても、機会あることに情報交換しておくことで、いざというときに有意な突破口となることもあるのである。またお互いをよく知った上であれば、時と場合によって、本来の職種にこだわりず、それぞれの得意が得意を考慮し、担当する仕事内容を入れ替える発想も必要であるように思う。このように「個」が重視される対等な関係であるからこそ、コラボレーションの可能性は広がるのではないかと思う。

そして「個」が重要視されるためには、連絡を密にすることも必要となる。関わるメンバー全体の話し合いの場を持つことができれば理想的ではあるが、それぞれのあたらしい日常の中で、多数人数での会議などを開こうと思うと、予定が合わせずになり、なかなか時間を生み出すことができなくなってしまう可能性が高い。逆に、「ちょっとちょっと情報交換をして、さっと終わらせ」ことで、お互いの負担を軽減させ、情報交換を密にしやすくする。また昼食時やお茶の時間などを利用すると、日常の仕事から一時的にはなれ、開放的な雰囲気であるために、思いもかけない創造的発想から事態が好転することもある。さらに情報交換で、それぞれの意見の共通点や関連性をつなぎ、1人1人の認識が全体の認識へと変換されていくようなコミュニケーションの工夫がなされると、スムーズなコラボレーションが動き出しやすいように思う。

時折、「コラボレーション（連携）」を強調するあまりに、相談者がたらい回し状態になってしまう現象や、周囲のスタッフが様々な面に対応しているにも関わらず、肝心な本人自身への対応が希薄になってしまう現象を耳にすることがある。一見、周囲が皆当事者を心配し、連携システムをうまく活用しているように見えるものの、思うような効果がでない状況が発生してしまうのはなぜだろうか。我々は、スタッフを雇用し、システムを構築すると、「コラボレーション」が完成したような錯覚に陥る。もちろんシステム作りは重要な基礎ではあるが、コラボレーションがうまくできるかどうかは、大枠の影にある「個」がいかに組み込まれているかではないのだろうか。現場でのコラボレーションが本当の意味で有意義となるためには、単に組織的な連携システムの構築ではなく、その問題に関わるスタッフの「個」がすべて活かされ、つながり、ファジーな連携がとれることが必要なのではないかと考えている。